

労働組合と教育

Rengoアカデミー・マスターコースと連合寄付講座 -

くさの ただよし
草野 忠義

(社)教育文化協会・理事長

私の故郷、大分県の山間部の小さな町に、ふと見過ごしてしまうような茅葺の草庵が観光スポットの一つとしてある。小さなとは言っても、塀や木立に囲まれていて目に付きにくいこともあるかも知れないが、その時代にはそれなりに立派な建物であったと想像できる。その名を「咸宜園(かんぎえん)」という。

現時点で見ると、とてもこの小さな建物から、明治維新を始めとする近代日本を作り上げたリーダーたちが育っていったことに思いを馳せるのは容易なことではない。この「咸宜園」は、1805年に江戸時代の先哲・広瀬淡窓師によって創立された全寮制の私塾であり、以来約80年間で全国68カ国のうち66カ国から塾生が集い、延べ4,800人を超える塾生が学んだと言われている。その中には、高野長英(蘭学者・蘭医)や大村益次郎(日本陸軍の基礎を築く)などの名前も見られ、またつい最近亡くなられたジャーナリスト筑紫哲也氏の先祖もこの咸宜園で学んだそうである。ちなみに「咸宜」とは「みなよろし」の意味であり、江戸時代という背景を考えれば、身分を問わず、男女を問わず受け入れた、というこの私塾とその創始者である広瀬淡窓師の先見性にはただ頭の下がるのみ

である。

冒頭何故この咸宜園から始めたかと言えば、まさに教育の重要性、よく教育は国家百年の計と言われるが、その例示として私の故郷の話を引き合いにしたわけである。

教育文化協会の教育活動 ～中心はマスターコース

(社)教育文化協会においては、文化活動や出版活動にも力を入れているが、何と云っても教育活動がその事業の根幹を成していることは言うまでもない。その一つが「Rengoアカデミー・マスターコース」である。これはナショナル・センター連合として、将来の労働運動のリーダーを育成しようという目的で始めたわけであるが、連合初代事務局長であった故・山田精吾氏が強く求めていたものであり、いわば山田精吾氏の遺言でもある。これを受けて2001年5月に開設し、現在開講中のもので第8回を数え、受講生は約200人になる。修了生からは既に産業別組織の三役、地方連合会の事務局長あるいは県議会議員が誕生するなど、第一線で活躍する人材が出ていることは



Rengoアカデミー第6回マスターコース（後期）

誠に喜ばしい限りである。合宿形式で講師陣には一流の研究者を配置しゼミも必須とするなど、受講生にとってはかなり厳しいものになっているが、それだけにいわゆる「卒論」が審査に通った時の達成感には特別なものがあると聞く。地道な活動ではあるが、ここで学ぶ労働組合役員がいる限り、日本の労働運動の将来は明るい、という信念のもと、さらに充実した活動に努力して行きたい。

学校教育への積極的な進出 ～ 連合寄付講座の取り組み

さて、(社)教育文化協会としては、このような労組リーダーの養成のほかに、学校教育への積極的な進出も必要であると考えた。これは一つには学校教育での労働者の権利、労働組合に対する教育が不十分ではないか、という考えから出たものである。もう一つは社会に出る前に「働く」ということの意味をしっかりと考えてもらう必要があるとの認識から出たものである。(財)連合総研の「勤労者短観」などの調査によれば、労働者の基本的権利や労働組合に対する知識や認識が希薄であることが浮き彫りになっている。加えて、聞くところによれば、大学での労働関係の講義(労

働経済学、労働社会学、労使関係論など)が減少しているとのことであり、また司法試験に於いて労働法が必須科目から外されてしまったという現実に対する危機感が後押ししているのかもしれない。

このような考えから「労働の現場」を伝える「働くということの意味」を考えてもらう「労働運動・労働組合の存在と役割・意義」を理解してもらうとの目的で、まずは大学への寄付講座という形で始めようとしたわけである。

そこで、まず最初は日本女子大学からスタートすることとした。これは、私たちが良く知っている先生がいることが不可欠の条件であることから、先に述べた「Rengoアカデミー・マスターコース」の教務委員長をやっている日本女子大学の高木郁朗教授(当時、現在は同大学名誉教授)と相談して、日本女子大学から始めることになった。日本女子大学では2005年度から3年契約で実施し、まず第一期の寄付講座は2007年度でひとまず区切りとした。次に進めたのが同志社大学であるが、これは関東だけでなく関西においても実施したいとの思いと、同大学に石田光男教授がおられたことが大きく寄与し開設したものである。続いて、埼玉大学、一橋大学と開設し、現在はこの三大学で実施中である。埼玉大学、一橋大学ともに私たちの考えを充分理解していただいている先生方がおられたことは言うまでもない。

ところで、日本女子大学の場合は学部の規模もあり、毎回40人から80人位の聴講生であったが、現在展開中の大学では150～200人規模の聴講生である。この数から判断して、当然のことながら履修単位になるということもあるかもしれないが、私たちの目的や意図がかなり受け入れられており、好評を得ていると自画自賛しているところである。講師陣は出来るだけ第一線で活躍している

労働組合の役員にお願いし、自らの実体験をベースに講義をしてもらっているが、そのことが聴講生たちに新鮮さを持って受け止められているのではないかと考えている。私が言うより、実際に聴講生がどのように感じているかを見てもらった方が真実味があると思うので、数多くの意見・反響の中からそのいくつかを紹介することとしたい。

- ・自分の中で「古い」「暗い」というイメージだった労働組合というものについて「物事を変え、社会を変えるために労働組合は存在する」との言葉を聞いて、「労働組合は、古くて暗い存在ではなく、むしろ新しいことに挑戦し、社会を明るくする存在なんだ」とハッと気が付かされた。
- ・この講座を通して、現代の労働組合が果たすべき役割と抱えている苦悩、そして労組の将来について考えさせられた。
- ・巷では「今の労働組合は腐っている」と批判する人もいる。しかし、労働者を守る労働組合が存在しなければ、誰が労働者の雇用や生活を守るために使用者と対等に交渉できるのだろうか。
- ・社会人になる前に、すべての学生はこの講座を受講すべきだと思う。
- ・普段の授業と違って、実際に現場第一線で活躍されている方が毎週違ったテーマで話を聞かせてくれるのがとても興味深かったし、どのテーマも現代日本の大きな社会問題であり、かつ将来自分たちが深く関わる問題だった。「生きた理論」を学ぶことができる授業だった。
- ・この講座を受講するまでは、労働組合といえば、ハチマキを巻いて「賃金を上げろ！」などとデモするだけのうるさい人間たちの集団だと思っていた。しかし、毎週この授業に参加して、労働組合の人たちが働く人たちのこ

とを真剣に考えていること、そして、そうした人たちの支えがあって組合員が働いているということに気づかされた。

- ・雇用社会といわれる現代の日本社会は、労働組合が存在することによって成り立っていると捉えるべきだし、それだけの社会的存在意義を労働組合が有していることを教えてくれる授業だったような気がする。
- ・今後、低下した組織率を改善することなど、労働組合にとっても多くの課題が残されているが、もっと国民一人ひとりに対しても、このような労働組合の社会的存在意義を伝え、関心を高めていくことが何よりも大切だと思う。

如何でしょうか。私としては、当初考えていた以上の真面目な感想や意見が寄せられたと実感している。強烈なインパクトと言っても過言ではないと考える。もちろん、中には授業が面白くない、よく分からない、本当にそうなのか、などという反響も見られるし、私が話していた時にも寝ている学生がいなかったわけではない。しかし、大半の学生の目は生き生きしていたと思う。既に聴講生は延べで1,600人以上にのぼっている。学生全体から見れば僅かな人数かもしれないが、私は決して小さな数字だとは思っていない。政治学分野では、本当に変革しようという人が数



一橋大学における連合寄付講座

パーセントいれば、物事は変革しうるといふ説があると聞いている。この小さな水の流れを大河に育てていくことが大切である。そのためには、これらの聴講生がこれから企業などに勤めて働くことになった、まさにその場所で幻滅や失望を感じさせたり抱かせてはならない。そういった意味でも、組織率の向上や職場における労働組合活動の充実・強化は不可欠の課題である。と同時に、(社)教育文化協会としては、財政や人員などの資源に大きな制約はあるものの、この寄付講座の拡充に努力していく義務があると考えている。一方で、大学のみならず高等学校や初等教育の場でもこれに類する関与が重要であることは論を俟たない。幸いにして、連合全体では地方連合会に対して高等学校や中・小学校への出前講座を含めた

関与を推奨していると聞く。その面でも(社)教育文化協会としてお手伝いできるものがあれば実行していきたいと考えている。

冒頭でも述べたように教育は国家百年の計といわれるように、時間も掛かるし即座に効果があらわれるものではないかもしれない。加えて、派手な、特に人目を惹きつける活動でもない、換言すればささやかで地味な活動とも言える。しかし、そのささやかな活動が、小さな芽を生じ、その芽がやがて育ち、花を咲かせ、大きな成木になっていくという夢を持ちながら、活動に邁進していかなければならない、と自らに言い聞かせている昨今である。

最後に蛇足かもしれないが、広瀬淡窓師の有名な詩を掲げたい。

休道他郷多苦心	云うことをやめよ、他郷苦心多しと
同胞有友自相親	同胞友有り、自ずから相親しむ
柴扉暁出霜如雪	柴扉(さいひ)暁に出ずれば、霜雪の如し
君汲川流我拾薪	君は川流(せんりゅう)を汲め、我は薪を拾わん

(注) 山の中で薪を拾い集める方が、川の水を汲むより大変な作業であるとの解説がある。